

ちばしや通信 (Vol.10)

特集

福祉・介護における
“クオリティ”（支援の質）
を考える③

前号に引き続き、福祉・介護における
“クオリティ”（支援の質）を他地域での実践
事例を通じて考えていきたいと思ひます。

【事例】さかえまち（東京都日野市）
（高齢分野：小規模多機能型居宅介護）
若年性認知症の当事者と家族の会
「芽吹き」を創るまで

○取組み概要

小規模多機能ホームさかえまち（以下、さかえまち）では、平成23年に日野市で初となる若年性認知症の当事者と家族の会「芽吹き」を立ち上げ、今日まで活動を続けている。現在10名の当事者とその家族、そしてこの地域のサポーターが入会している。活動を開始してから、五、六十代のアルツハイマーや高次脳機能障害の方の相談を受ける機会が増え、相談を受ける中で、さかえまちを利用したいと希望される方もいる。そういった方々を受け入れていくうちに、現在は、25名の登録者中7名が65歳以下という、若年の方が複数利用される特徴的な事業所となった。なお、「芽吹き」の会員である当事者の方の半数は、さかえまちではなく、他のサービスを利用されている。この会の活動を担っているのはさかえまちであるが、事業所の登録者だけではなく、広く地域の方を対象とした相談窓口としても機能している。

若年性認知症の方を支援する会を創るにあたっては、49歳でアルツハイマーと診断された男性の利用者夫妻との出会いからである。奥様には周囲の理解を得られず悔しい思いをした経験があり、当初より、日野市でこのような会をともに立ち上げてほしいとお誘いを受けていた。このご夫妻を支えたいという思いが会を創る原動力となった。しかし会を立

ち上げようとしても、高齢の方に比べ若年の方の数はずっと少ないため、受け身で待っているだけではこの試みを広めることはできない。そこで日野市と医師会に協力いただき、当事者の方やその家族との出会いの場をつくることを目的に、若年性認知症のセミナーを開催。セミナーでは期待していた通りに50代の方が来場され、繋がり、会を立ち上げることができた。その後も日野市が「芽吹き」のメンバーによる講演会を開催し、周知の機会を得た。この講演会を機に「芽吹き」という若年性認知症の方の相談窓口の存在が周知され、問い合わせを受けるようになっていった。

○「芽吹き」の活動内容

「芽吹き」では隔月でイベントを開催している。ポーリング大会や素麺流し、植物園散策、宴会等々、当事者の方のご希望に応じて活動内容を決めている。開催の時は地域の方の力を借りながら、さかえまちのスタッフが黒子となって盛り上げている。

また、ご家族同士で体験を分かち合えるような懇談会も設けており、懇談会には医師も参加し、家族の悩みや疑問に答えている。何かあれば個別相談も随時受けている。

若年性認知症についての啓発活動にも力を入れており、「芽吹き」の会員とともに各地で講演を行っている。講演以外では、若年性認知症をテーマにした映画『明日の記憶』の上映会も実施。日野市の協力を得て1,500名の方が来場された。



当事者が育てた野菜



「芽吹き」の素麺流し

○小規模多機能ホームさかえまちの活動内容

次に「芽吹き」の活動とは別に、さかえまちの日々の活動内容も紹介する。若年の利用者の活動で最も力を入れているのが農作業である。これは56歳のご利用者の一言で始まったものである。彼は自分が病気であることを理解しているが、その喪失感の中、畑仕事は唯一自信を持ってできる作業だと言われたことがきっかけとなる。ならばその力を発揮していただこうと、無料で使える畑をスタッフが探して来たことから取組みが始まった。天気の良い日は若年の方数名で畑に出かけ、採れた野菜は地域の販売所に卸し収益も得ている。他にも近所のケーキ屋さんの鉢植えの手入れを担ったり、地域で行われている果実の摘み取り作業に参加したりと、屋外での活動が中心となっている。こうした活動が好きな人にとって一番困るのが雨天時である。室内で何もせずじっとしていること程辛いものではなく、そんな時は日曜大工やシュレッダーがけ、卓球など、室内でもできる作業や運動を行っ

ている。

このように「芽吹き」及びさかえまちでは、高齢者の多い施設や活動に馴染めない当事者の方にとっての居場所として機能している。デイサービスに馴染めず、さかえまちの登録に至った方もいる。さかえまちでは、自然に若い利用者同士が集まって過ごしている。

病気を患う前に行っていた活動を再開し、本来の力を取り戻せた方。62歳で高次脳機能障害となったある男性利用者は、登録当初、道が分からず行方不明になるという出来事があったが、ともに作業を続けて行くうちに、徐々に機能が回復し、現在は元々勤めていた会社に通勤できるようになった方など。小規模多機能型居宅介護というツールをうまく活用し、若年の方が安心して過ごせる居場所づくりができ、また本来の力を取り戻すきっかけにもなり得るということが分かってきた。

さかえまちは家族にとっても大切な居場所となっている。当事者の方が若いこともあり、高齢の方よりも見た目には健康的なため、いくら家族が介護の苦勞を語っても、その度に周囲の無理解に傷ついてしまう。こうした無理解から、ご家族が孤独に陥る場合もある。

また「芽吹き」の会員の中には隣の市から来られている方もいる。60歳でアルツハイマーと診断された男性とその奥様である。隣の市に若年性認知症の集まりはないため、「芽吹き」を訪ねて来られたものである。その奥様からは「ずっと誰にも理解してもらえずにつらかったが、この会で悩みを分かち合えて救われた」といった言葉聞かれた。



畑作業



鉢植えの手入れ



ご利用者作の靴箱

やはり何よりも大きな成果は、若年の方を支援する糸口ができたことである。支援をし

たくとも、若年性の当事者の方がそこにいるかわからなければそれはかなわない。若年の

方の相談窓口としてさかえまちが認知されるようになったことで、登録者だけではなく、広く地域において困っている方々の支援も可能になった。

若年の方は高齢者以上にご自身の意思をしっかりと表明されることが多く、納得できなければ何事にも応じてもらえない。以前、ある利用者に当施設の組織としての未熟さを指摘されたことがあった。この方は数年前まで部長として活躍された方である。組織のあり方を熟知された利用者だったからこそ、事業所のあり方や対応のまずさを指摘していただくことができたのではなかろうか。人手不足とか、忙しいといった言い訳は通用しない、こうした利用者からの厳しい評価に日々真摯に向き合っていくことで、スタッフの支援能力が向上したことも、若年の利用者を受け入れたことで現れた成果の一つである。

○今後の課題

若年性認知症の方を支援する上での一番の苦労は、ご家族が当事者の病気をなかなか受け入れられないところにある。高齢の方であってもご家族が認知症を受け止め切れないことは少なくない。若年の方の場合はなおさらである。若くして認知症になることは、誰にとっても思いもよらないことであるが、家族が受け入れら

れずにいる間にも、当事者の方の心身は高齢者以上に速いスピードで変化していく。当事者の方と家族のこうしたギャップを埋めることも「芽吹き」の役割の一つである。しかし現状ではこのギャップを確実に埋める方法はみつからない。家族の気持ちを察しながら、当事者の方の変化を客観的に伝えるだけで精一杯のようである。

もう一つ課題は、まだまだ多くの能力がある若年の方が、わざわざお金を支払い介護保険を利用していることに違和感を覚えることである。周囲の理解があれば、ちょっとした支援で当事者の方は働くことができるのである。以前、アルツハイマーと診断されてから約3年間遺跡発掘のアルバイトをされた男性の方がさかえまちにもいたが、遺跡の発掘の場では生産性はあまり追及されなかったため、働くことができた。若年性の認知症を患っていても、周囲の理解があれば十分働けるのである。つまり、認知症だからといって必ずしも介護保険サービスを受ける必要はないのではなかろうか。遺跡発掘のように、当事者の方が周囲の理解を得ながら働ける場を増やすことが、介護保険サービスを利用すること以上に大切であると考え。そういった場を増やして行くために、小規模多機能として何ができ、何が求められているのか日々模索することが求められる。

さかえまち（東京都日野市）

【事業所名】 小規模多機能ホームさかえまち

【法人種類】 社会福祉法人

【事業所住所】 東京都日野市栄町 2-17-1 都営栄町二丁目アパート

【生活圏域人口】 26,621名（H24年1月1日現在）

【市町村人口】 180,975名（H27年1月1日現在）

【生活圏域の設定数】 市内全域で9か所

【生活圏域の地域特徴】

かつては辺り一面が田園だった名残で、地域のところどころに用水路が残っているのどかな地域である。古くから住んでいる同族の方が多く、同じ苗字の方が集まっている地域も複数ある。他方、新興住宅地も広がっており、後から越して来た新しい住民の方も増えている。古くからの住民と、新しい住民の交流は少なく、関係性の希薄さが課題である。小規模多機能ホームさかえまちは都営団地の1階にあり、周囲も同様の団地が立ち並んでいる。元自治会長さんによると、個人情報保護のために自治会名簿もつくれず、どこに誰がいるのか良く分からないそうで、何かあった時に助け合うことが難しいと心配されている。

【生活圏域高齢化率】 18.5%（H24年1月1日現在）

【登録定員／登録者数】 25名／登録者数25名《若年の方7名》（H27年1月31日現在）

【通い定員／通いの1日平均数】 通い定員15名／通いの1日平均数12.9名

《若年の方3.8名》（直近1月の平均）

【宿泊定員／宿泊の1日平均数】 8名／宿泊の1日平均数3.9名《若年の方0.3名》（直近1月の平均）

【1日あたりの訪問件数】 4.4件／《若年の方1.0件》（直近1月の平均）

【平均介護度】 2.4（全体）／2.7《若年の方》（H27年1月31日現在）

※注 特集の原稿は、紹介する団体や関係団体から提供される原稿、又は本会取材の原稿等からになります。原稿によって文体が異なる場合がありますので、ご承知おきください。

理事からのメッセージ



私は普段、教員や保育士等を養成する大学に勤務しています。元々は、老人ホーム等の福祉・介護施設で勤務していました。その後、介護福祉士等の養成校の教員を経て、現在の仕事・活動に携わっています。

皆様ご存じのように、日本は急速に少子化が進行しています。戦後の第一次ベビーブームの時期には出生数は 250 万人を超えていましたが、厚生労働省の報告によりますと、2014 年の出生数は 100 万 3532 人で、15 年は 100 万人を割り込むことも予測されています。これからの日本を支えてくれる若い世代が急速に減少してきているのです。

一方、高齢化についてですが、総人口に占める 65 歳以上の割合が 25.1%と過去最高になっています。加えて、75 歳以上の後期高齢者の割合も、終戦直後は 1%台でしたが、現在では 12.3%に至っています。長生きのできる国になったこととはとても喜ばしいことですが、加齢とともに、支えの必要な人は増えていきます。

特に千葉県は、埼玉県に次ぐ全国 2 番目のスピードで高齢化が進行しています。このような状況だからこそ、職業として、お年寄りや障がいのある人、子どもに「かかわっていききたい」と思う人たちは貴重な存在です。

養成校の教員として、「様々な日常生活上の生きにくさを抱える人たちの思いを感じとり、受け止め、応える・サポートする」人材を養成し、現場に送り出していくことの重要性を今、改めて強く感じています。

学生が入っていきこうと考える福祉・介護現場は、人と人との直接的な関係性が求められます。ですが、学生自身の育ちの環境も急速に変化しており、人と向き合った関係性が築きづらい中で成長してきています。専門職になるためには、学外実習が必修となりますが、その期間等の問題により、十分とはいえません。

住み慣れた地域で、それまでの関係性を含めた形で住み続けることをサポートできる福祉・介護職になるためには、まず、学生自身が、地域の中で、様々な人との出会い・関わり合いの場を意図的に創らざるを得ない状況にあると思っています（なかなか難しいのですが）。

そのような学びと経験の蓄積を通して、「地域」を意識することのできる福祉・介護職の養成に、私は携わっていきたいと思っています。

ただ、福祉・介護職としての学びの場は、在学期間で終わりなのではなく、むしろ卒業後の福祉・介護現場での経験と学びが重要です。

当法人にも新人職員が複数おります。東金地域の皆さんの様々な地域活動や関係性の中に、参加し学ばせていただき、地域に根差したサポートができるよう努力していきますので、今後ともよろしく願いいたします。

宮下 裕一（代表理事／植草学園大学 教授）
※代表理事 3 人のうちの 1 人です。

8月7日はこの夏一番の暑さで、観測地点の茂原は最高気温 37.8 度ということであった。観測地点の気温測定環境は、地面より高さ 1.5m、日陰で風通しのよい場所、なおかつ芝生という環境下で測定されているということで、連日の様に猛暑日を記録している、館林や熊谷等の観測地点も同様の環境なので、日の当たる場所での体感気温は+5度くらい高いとのことである。また、館林・熊谷が全国的になぜ最高気温を記録しているかということ、関東北部の山沿いから吹き降ろす温かい風と、鹿島灘や房総半島沖にかけての太平洋から吹く涼しい風が、ヒートアイランド化している東京上空を通過することにより、温風となり、その温かい風どうしが握手する地点が、館林や熊谷付近になることから、例年最も暑いところとして、全国的にも有名な地域となっている。

この記録更新中の猛暑日も今日までで、明日からやや落ち着き、この地域にもやっと雨が期待できるとのことなのでカレンダーを見たら、なんと8月8日は立秋であった。これからも暑い日々が続くが、秋の気配を感じとることのできる日がそう遠くないことを期待している今日である。

早春賦の一節に「春は名のみの風の寒さよ…」と歌われているが、立春を過ぎてはまだまだ寒いし、立秋を迎えてもまだ暑い日々は続くということで、厳冬、酷暑の時期の健康管理も大切だが、この時期を過ぎて、ほっとすると、体調を崩すこともあるので要注意である。

立秋を過ぎると残暑というようだが、本会事務所の南側の僅かなスペースに、鶉嶺の家のK職員が植えたひまわりが、間もなく季節の変わり目を告げているように感じる。実は、このひまわり最盛期の頃から気になっていたのだが、一本だけが太陽に背を向けて咲いている、それも、他のひまわりと違って力強く、触ってみても何か異なっている風に見える。以下、その職員との簡単な話のやり取りだが、「Kさんの植えたひまわり一本だけ太陽に背を向けて咲いている、何だか、自分の人生に重なるものがあるんだよな…」、Kさんいわく、「そうなんです、私も時々触ってみるんですけど、あのひまわり、只者ではない様に思えるんです。」「いや私はタダモノだけど」と切り返させて頂いたが、今の、若い人たちの一部には、個性がないと言われている。スマートフォンやパソコンなど、電子機器は、現代社会にとって欠かせないものであるが、ネット社会の歪も現実の問題として、向き合っていかなければならないのではないかな。

仕事の関係でたまに電車を利用して頂く事があるが、多くの人がスマホの画面を見ている中で、時折、文庫本を読んでいる女子高校生を見ると、何かほっとする瞬間がある。秋には「読書週間」もあるので、図書館に通ってみるのも一つの選択肢ではないだろうか。

(齊藤 操/総合施設長)

各種イベント & 活動情報

東金市	きもの地サロン	東金市	ヨガサロン	東金市	穂垂るの会
	着なくなった着物をほどこ、アクセサリー、ポーチ、バッグ、タペストリーなどの小物から服まで、その人に合わせてリメイクするサロンです。 開催日：9月14日(月) 9月18日(月) 詳細を知りたい方は連絡ください。鶉嶺の家(50-0285)		旧道の岸本薬局の斜め向かいにある「ありさ」の2階で開催中。 開催日：8月26日(水) 9月2日(水) 9月16日(水) 興味のある方はご連絡ください。ありさ(50-0362)		日時：9月10日(木) 13:00~16:00 内容：①研修会 「認知症と薬について」 ②例会 会場：ふれあいセンター 経費：200円(お茶代) 主催・連絡先：穂垂るの会・井上 (090-7171-1701)

【法人内の各事業所から】

鶉嶺の家（高齢者・障がい者）

介護という仕事を選び鶉嶺の家に勤めてから高齢の方、障害のある方、地域住民の皆さんなど色々な方との出会いがあった中で、嬉しい事も悲しい事も沢山経験させて頂きました。

先月は開所当初から鶉嶺の家を利用して下さっていたおばあちゃんが亡くなりました。体調を崩され鶉嶺の家を休まれても、私たちスタッフの事を気にかけてくれる優しい方でした。時には厳しく注意を受けた事もありますが、スタッフ一人一人の成長に繋がっているのだと最近になってよく感じます。

介護の仕事は人の『死』に関わる事もありますが、人の生きる力に驚かされる事もあります。体調を崩された後、三か月間ほぼ毎日寝たきりで車イス生活だったおじいちゃんが最近になり元気を取り戻し、昔のように自分の足で歩き始めました。入浴中にも自分の足で浴槽につかったり、人間の持つ生きる力にはスタッフも驚かされてばかりです。

迷い・考えさせられることが多い日々ですが、「地域で暮らす」「人の輪の中で暮らす」とは、こういうことなのかも…と何となく感じるこの頃です。

鶉嶺の家（児童）

ただ今、夏休み真っ最中。朝から賑やかに過ごしています。

いっぱい遊んで、あっという間に昼食の時間です。スタッフにとっては、この時間が一番の山場です。未就学児が多いせいか、偏食の児童が多い為、スタッフにとっては嵐のような戦いの始まりなのです。

前より色々食べられるようになったA君も、気に入らない物があると終わりにしたい合図として「ごちそうさま」を繰り返します。「ごちそうさま」は今年から言えるようになり、可愛い言い方と声とが相まって、聞いている

スタッフはつい微笑んでしまいます。その他「おしまい」を繰り返すAちゃん。食べたい物が終わると寝転がって目を閉じ、もう要らないアピールをするB君。食べながら歩きたいC君。そんなわけで、昼食時とても賑やかです。

小学校高学年になったD君は、以前の好き嫌いがウソのように（まだ嫌いな野菜はありますが）、よく食べるようになりました。体が大きくなると、嫌いより食欲が勝るのですね。

今ゴネゴネしている小さな子たちが、モリモリ食べる姿を早く見たいものです。

子ども支援センターぽけっと

子ども達が楽しみにしていた夏休みももうすぐおしまい。ご家族で旅行や花火大会・お墓参り、またお家でのんびりなど夏休みにしかできないことをたくさん経験した子ども達は更に逞しく成長したように感じます。

久しぶりにぽけっとに来たお友達が、真っ黒に日焼けしていたり、身長が凄く伸びたように見える子もいたり、子ども達の変化が見られることが楽しいです。

子ども達は朝からパワー全開！！エアコンもフル回転！！ぽけっとには“夏バテ”という言葉はありません<(`´)>ご飯もモリモリ、

食欲たっぷりです。午前中は宿題を頑張っている子、TVゲームに夢中の子、お友達とババ抜きや神経衰弱で盛り上がっている子など一人一人がやりたいことを見つけて楽しんでいます。

午後は買い物や九十九里有料道路が無料となっている為毎日のように一宮方面へドライブ♪今まで行ったことのない公園も新しく開拓しました。

残りの夏休みも無事故で楽しい思い出が作れるようにスタッフも頑張ります。

サポートセンタースピリッツ

福祉有償運送に関するアンケートに回答して下さった皆さん、誠にありがとうございました。このアンケート結果をもとに指定がとれるよう前進していきたいと思えます。

7月のスピリッツのご利用では、ちょっと遠いおでかけを希望される方が多く、銚子、横浜、大宮とでかけてきました。7月で二十

歳の誕生日を迎える電車が大好きなMさんは、ずっと行きたがっていた大宮の鉄道博物館まで行きました。終始ご機嫌で笑顔いっぱい。電車をバーチャル運転できるコーナーにも行きました(^O^)二十歳のいい記念になったのではないかと思います。

街かど福祉相談室ると

るとで関わらせて頂いている方たちの年齢ですが、下は2・3歳から上は70歳くらいまでと、とても幅広いです。今年が平成27年！昭和でいうと90年。最近、昭和の文字を見るとちょっと古いなと感じてしまいます。かくいう自分も昭和生まれですが、自分が生きてきた歴史（というほど立派な物ではありませんが）を振り返ってみても、幼少の頃に携帯電話はありませんでしたし、学校の

授業中に近所のお母さんが子どもを校庭の遊具で遊ばせているのを窓から眺めていたり、今の世の中と随分違うものでした。福祉の世界も同様で、制度・仕組み・考え方等様々に変化してきました。

これからも新しい情報をキャッチし、皆様に提供できるよう、その年代の方に合わせ、その方の立ち位置というものを忘れないようにしていきたいと思えます。

ハンドワーク

残暑厳しい中、いかがお過ごしですか？7月の中旬にエコクラフトの注文が入り、今までソーイングボックス作業とおつまみ作業しか出来なかったある利用者さんが母親からの注文という事で、初めてエコクラフト作業にチャレンジしています。母親からの注文では色指定もあり、職員と毎日マンツーマンにて

一生懸命取り組んでいます。それからは、やる気が出たようで「エコクラフトやるの？」などと、職員に質問している姿をよく目にするようになりました。配色の話し合いにも、職員の近くにちょこんと座って話を聞くなど、自然と体が動いているようで、その姿がちょっと大きく見えました(*^_^*)

ありさ

ありさでは、おしゃべり好き、歌好きが集まっています。なので、ワイワイと喋ったり歌ったりしながら作業をしていることが多いです。（もちろん集中する時は、集中しています。）その中で頻繁に起こること……。それは言い間違いに聞き間違いです(^_^;)その中の例をいくつか挙げてみます。

歌が大好きなMさん。KANの大ヒット曲、「愛は勝つ」を歌った時の事。「しーんぱーい なんだかなあ♪」（心配ないからね）と歌っていました。

Hさんもこんな歌を歌っていました。「おま

えのトイレゆけえ〜♪」さあ、なんの歌でしょう？正解は、TOKIOの「宙船」なんです。（お〜前の手で漕いで行け〜）「漕いで」がトイレになってしまったんですね。（笑）そしてHさん、こんな歌も歌っています。「ぼーくらはみんないーきてーるかい？」自問自答していますね。アンパンマンでお馴染み、やなせたかし先生もビックリな哲学的アレンジになってしまいました。皆、この歌を聴くと大笑いで1日が楽しく過ごせます、(^o^)

かばの家

猛暑が続く今年の夏では、なかなかパンが売れません。今年も夏休みの2週間はエコキャップ作業をしています。初日約10kg入ったペットボトルのキャップの袋が30袋以上届けられました。みんなで使えるものと使えないものを選別します。もう慣れたものでどんどん選別出来るようになりました。狭い休憩所はエアコンと扇風機が付いていますが、みんなの熱気でとても暑いです。努力の甲斐あって一日に約12~13袋を仕上げる

ことが出来ました。

ふれあいセンターの夏祭りは皆が唯一楽しみにしているイベントです。多くの人が集まりますのでたくさんパンが売れます。前日の7日金曜日に約200個作りました。1週間ぶりのパン作りです。皆が頑張って一つ一つ丁寧に作りました。当日8日土曜日は、おかげさまで完売できました。ありがとうございました。

五根の家・グループホーム

認知症高齢者グループホームは、小規模多機能ホームを併設した形で平成23年6月に開設しました。

入居される方の「もう一つの家」という考えのもと、一人ひとりの時間や好み、家族や友人とのつながりを大切に、認知症や寝たきりでも、最期まで個人を尊重した支援をす

るよう心がけています。

また、入居者が出来ることを大事にして、苦手なことだけサポートする。

つまり「奪わない介護」を大事にしています。

入居者自身が「暮らし」の中にある「喜怒哀楽」を実感いただけるよう、日々支援をしています。

五根の家・小規模多機能ホーム

今年の夏は、例年になく猛暑続きで、体調管理が大変かと思えます。

7月末に福俵で行われた夏祭りに参加させて頂き、地域の皆さんとの交流や、地元の方々から頂いた差し入れを召し上がりながら迫力のある和太鼓の演奏、踊りのパフォーマンスに拍手を送りながら見るなど、楽しいひと時を過ごすことが出来ました。あるお年寄りの

方は五根に戻られてから、行っていないお年寄りの方たちやスタッフに踊りを見せて下さってました。素敵な夏の思い出の1ページが出来た事を心から感謝いたします。

これからまだまだ暑い日が続くので、夏バテや熱中症などにならないようこまめに水分を取り、猛暑を乗り切りましょう。



ちばしゃ通信 (Vol.10)

発行日：2015年8月19日
発行元：ちば地域生活支援舎
編集責任者：宮下・太齋
連絡先：0475-53-3630

【編集者のつぶやき】

- ・物事には、始まりと終わりがある。そうした繰り返しの中で、多くのことは、カタチを変え発展していく。ただ、終わるといふ出来事は、何度体験しても慣れないものだ。しかし、沈んでもいられない…終わりをじっくりと感じ・受け止めながら、次のはじまりを期待したい。自分もまた、学ばせてもらったことや今感じているものを、力にして、新しいことにチャレンジするキッカケにしてみたいと思う(Jerry)
- ・最近是一日中暑い日が続き参ってしまいそうです。それでも利用者さんはとても元気でびっくりします。最近朝から子どもたちがいて「おはよー!!」ととびっきりの笑顔で迎えてくれます。その笑顔で一日頑張れてしまいますね。(W)